

のすけ日記

宮崎恵理

なんで人月日は
肉球が女子好きか。
おひさますきなのは
理解できます。

のすけ



著者プロフィール

宮崎 恵理 (みやざき えり)

1960年、東京生まれ。

マリンスポーツの雑誌を発行する出版社勤務を経て、1989年よりフリーランスライターに。スポーツ雑誌・書籍で執筆、編集に携わる。最近はシドニーオリンピックに取材で出かけた。著書に『ウィークエンド・エンジョイシリーズ・ウインドサーフィン』(同朋舎出版)。

のすけ日記

2000年11月1日 初版第1刷発行

著 者 宮崎恵理

発行者 瓜谷綱延

発行所 株式会社文芸社

〒112-0004 東京都文京区後楽2-23-12

電話03-3814-1177 (代表)

03-3814-2455 (営業)

振替00190-8-728265

印刷所 株式会社エーヴィスシステムズ

乱丁・落丁本はお取り替えます。

ISBN4-8355-1024-0 C0095

©Eri Miyazaki 2000 Printed in Japan

のすけ日記

江苏工业学院图书馆
宮崎恵理
藏书章



表紙・イラスト／さとうみゆき

目次

第一章	一九九九年初春、のすけが大変！	5
第二章	のすけがわが家にやってきた	31
第三章	引っ越し、そしてまた引っ越し	55
第四章	のすけが大変、再び	89
第五章	のすけ、その後	159

第一章 一九九九年初春、のすけが大変！

九九年二月二〇日（日）晴れ。

のすけの体調に異変を感じ動物病院を訪れたのはすでに一ヶ月以上も前のこと。

今日から「のすけ日記」をつける。

日記なんてものをきちんとつけたためしは、これまで一度だって、ない。そんな私が日記をつけようと思いついたのは、のすけの尋常ではない健康状態に、今や、のすけの命の限界を見定めなくてはならない時がきたのだ、と直感したからだ。



おとうにゃん（元・夫Ⅱのすけを飼うようになってから私たち夫婦は互いに「おとうにゃん」「おかあにゃん」と呼び合うようになった。にゃんというのは、もちろん猫言葉だ。やれやれ。ネコバカだな）と別居してちょうど一年。豊島区に引っ越してきた。

一二月になってのすけときなこ（もう一匹の飼い猫、メス。のすけより半年若いキジ猫）の予防接種の案内が、以前通っていた横浜の動物病院から送られてきた。その動物病院の医師の一人から、現在の住まいの近くにある中野区の有名な動物病院を紹介されていたのだが、現在借りている駐車場に行く道の途中に小さな動物病院を見つけた。ガラス張りの院内では最新機器の手術室まで見え、窓には「子猫の里親を探しています」、「迷い犬を探しています」などの手描きの張り紙がある。ここなら安心してネコの体調を診てもらえると思い、歩いてわずか三分ほどのS動物病院にお世話になることにしたのだった。

一二月も終わり近くになって、のすけときなこを予防接種に連れて行ったところ、案の定、心優しい院長先生と動物好きのスタッフの人に迎えられ、思った以上にいい病院だったと確信した。

あわただしい年末が過ぎ、二度目の一人（プラス猫二匹）の正月を迎えて、しばらくすると、猫のトイレの汚れがいつもより早く目立つようになった。はじめは、新しく購入したトイレの砂（シリカサンド）の吸水率が悪いのかと思っていた。シリカサンドの砂はお菓子などの袋に入っている乾燥剤のシリカゲルを使ったもので、オシッコのたびに替えなくても、あつという間に乾燥し脱臭してくれる。普通の猫ならば一匹で約四週間使えたと、説明書きにはある。ウチはのすけが大型猫とはいえ、きなこは小さいのでいつもなら二週間で新しい砂と取り換えるというサイクルである。ところが、最近、やけに早くトイレの砂の汚れが目立っている。時には乾燥しきれないオシッコがチャポチャポと音をたてるところまである。

トイレの汚れに気がついてから、じつくり観察していると、のすけのオシッコの量がひどく多いことに気がついた。のすけがトイレに入ると、ジョジョジョーというものすごい量のオシッコを出す音がする。人間の子供が思いつきオシッコをしているような、そん

な音だ。それが、毎日、毎回なのである。

と同時に、のすけがひどく水を欲しがることにも気がついた。単なる甘え（以前からのすけは風呂場の水道の蛇口からわざわざ水を出させて飲むのを習慣としていた。それはのすけ流の甘えの一つだった）だと思っていたのだが、どうもそれだけではなさそうだと、のすけの健康状態を疑うようになった。

一二月に予防接種に行ったとき、横浜の動物病院からもらっておいたカルテのコピーをS動物病院にも保管してもらったこともあり、S動物病院に、まず問い合わせの電話を試みた。

「最近、ひどく飲み水を欲しがりオシッコの量も多いようですが……」

すると、糖尿病の典型的な症状だと言われ、ともかく血液検査に来るように、という指示をもらった。細かく検査をするため、朝いちばんに来院するようにと。

猫の糖尿病！

のすけはもとと体はデカイ。体重も八・八kgくらいある。確かにデブ猫だ。でも、お医者さんが推奨するという、アメリカのペットフード・サイエンスダイエツト”（しかもローカロリーのライトという種類）を主食にし、大好きなマグロの缶エサは時々しかやらない。猫が喜ぶ刺し身などを食べさせたことはない。決して美食、というわけではないと思うのだが……。のすけはたしかに食いしん坊だ。すぐ腹が減る。よくエサの催促をする。あんまりうるさいので、欲しがるときにちよつとずつ好物の方のカリカリエサ「モンプチ・ドライ」をやっていたのは、事実だ。でも、いきなり糖尿病だなんて。

血液、尿、レントゲンの検査をして出た結果は、果たして、糖尿病だった。血糖値（尿の糖分）が正常の値をはるかに越えていたのだ。正常な血糖値は人間の血圧と同じような、八〇〜一二〇くらい。多くても二〇〇くらいといわれている。が、のすけの場合、三〇〇を越え、何度か検査を重ねても、減るところか高くなるばかり。血糖値は血圧と同様、激しい緊張状態では通常値よりはるかに上がることもあるという。だから、血糖値のテストは一回だけでなく、定期的に何回でも行わなくてはならない。のすけは病院で血液や尿の

検査をしたときはもちろん、家でリラックスしているときに思いっきり出したオシッコからも高い血糖値が検出されたのである。

猫の糖尿病には厳しいダイエットと、インシュリンの注射が不可欠（それも毎日、自宅で打たなくてはならない）といわれた。突然の結果にただただ途方にくれるばかり。一週間ほど投薬と病院で処方されるダイエットフードだけで様子を見守った。規則正しく、一日に二回、決められた量のドライフードを与える。動物のお医者さんが

「これは相当まずいらしいです。どうしても食べないときは普通のエサと混ぜて食べさせてもいいですよ」

というほど、まずいダイエットフードだ。それでも食事ときはあまりにのすけが腹ぺこなので、きなこの皿からもエサを食べてしまう。相当まずくても、こんな状態だ。これまで、食べたいときに、食べたいだけエサを与えてきただけに、のすけの腹ぺこストレスがひどくなり、ついには元気がなくなってしまうまでになってしまったのだった。

検査、血糖値を下げる（実際は血糖値を下げられるほどの効果のある薬ではない）投薬

を始めてから何日かしたある日の深夜、のすけが甘えたいときに好んでいる風呂場で、息をひそめているように、じっと座っていた。この様子を見て、これはただ事ではないという虫の知らせのような直感がはたらいた。このまま、弱つてのすけが死んでしまうのかもしれない。

そのときになって、初めてインシュリンの注射のことを真剣に考えるようになった。糖尿病に立ち向かうためには手間がかかろうが、のすけがいやがろうがインシュリンの注射をしてやらなくてはいけない。そのことから逃げることはできないのだ、と。

それでもまだ、迷いはあった。いやがる注射を毎日して、寿命を延ばしてやったほうがいいのか。それとも、おいしいものを食べて短い人生を楽しませてあげたほうがいいのか。翌日、猫を飼っている友人に片っ端からこの究極の選択についての問いを投げ掛けた。あなただったら、インシュリンの注射をして延命させる？ それとも命を短くしてもいやがることをせずに生活させる？

「それがストレスになってしまつて元気がなくなつたりハゲたりする。自然のままにして

おくほうがいい」

「お医者さんがいうように、インシュリンの注射をすれば少しでも普通の生活ができるというのなら、できる限りのことはしてやってはどう？」

泣きながら受話器を握りしめ、親身になって答えてくれる友人の言葉を何度も何度もかみしめた。

それから、以前かかっていた横浜の動物病院にも電話をした。まだ、のすけが子供の時分、オモチャを飲み込んでその病院で開腹手術をしたことがあり、院長先生も当時ののすけのことを覚えてくれていた。のすけの糖尿病のことやインシュリンの注射が必要なのかなどを聞いてみようと思ったのだ。電話したのはちょうどお昼休みぐらいの時間帯だったけれど、院長先生がじかに電話口に出られた。

「尿の中にケトン体というのが発見されるとインシュリンが不可欠な糖尿病とされています。猫の糖尿病の七五%がこのタイプですね。今かかっている病院で牛型や豚型のインシュリンを使用するというなら、医者を変えたほうがいい。ヒト型のインシュリンを与え、

一、二ヶ月後に抗インシュリンホルモンが生じたかどうかの検査をして様子をみるようにしてください」

そんな、専門的な治療内容についてもアドバイスをくれた。

豊島区に引っ越してくる以前、のすけときなこと私たち夫婦が横浜から目黒に住まいを移してから、年に一度の予防接種などの折には、横浜にあるこの動物病院まで車を飛ばした。院長先生は近くで動物病院を探した方がいい、と勧めてくれたが、のすけもきなこと幼い頃からこの病院で世話になり、病歴や体調を知っていてくれていたので、ほかの病院に替えることは考えられない、と思っていたのだ。

二、三年前、のすけの左目のすぐ上に、小さなハゲを見つけた。針の先でつついたような小さなハゲだが、しばらくすると、のすけがそこを引っ搔いて血をにじませたので、横浜の病院へ連れていった。

病院でハゲの部分から細胞を採取し、検査に回された。結果は、良性の腫瘍といわれた。「まあ、おできです。のすけちゃんはこのいうものができやすい体質なんだと思います。

今回みたいに表面の見つけやすいところにできている分にはあまり問題にはならないんですが、内臓などにできてしまうと、飼い主が気付いてやることができないんですね。それが、いつ悪性に変化しないとも限らない。のすけちゃん、爆弾を抱えているようなものだ、と思ってあげてください」

と、説明された。その時には、のすけのハゲがただのおできだった、ということに安心するばかりだった。爆弾を抱えているような体質、という言葉は、その場で頭の中から消えてしまっていた。

爆弾。のすけのお腹の中に、そんなものが仕込まれていたのだろうか。糖尿病は、爆弾なのだろうか。もう、やるしかない。インシュリンの注射をすぐにも始めるしかない。

離婚の危機に直面して、私は、自分が「悲しみを食べる者」だと思っていた。でも、本当は違っていた。のすけが私の悲しみや苦しみをガツガツと食べて、そして糖尿病になっちゃった。ふびんな食いしん坊、かわいい天使。